賃上げ要求が八二%

炭労アンケートまとまる

さきに行われた炭労の斗争体制確立の調査活動の一環としての組合員アンケートは、三池労組内の集計がこのほどまとまった。そのうち主なものは次のようになっている。

三池労組配布数＝三、八〇〇部
回収数＝一、七八三部

▲あなたにとって、いま何が一番切実か。
(1)賃金を上げてほしい 一、四三六名（八二%）
(2)いい職業があれば転職したい 一四五名（八%）
(3)労仂強化排除が先決 六九名（四%）
(4)退手斗争に力を入れよ 六三名（四%）
(5)当面の問題は進学だ 三九名（二%）

▼子どもの職業について
(1)子どもの希望にまかせる 八一三名（五二%）
(2)私の代（鉱夫）限り 七三八名（四五%）
(3)つがせたい（鉱夫） 五名（三%）

▼どこから借金しているか
(1)労金から 三五八件
(2)高利貸しから 四八件
(3)無じん 一九件
(4)その他 二八二件

▼月賦購入について（その内容）
(1)衣類 八九一件
(2)電気器具 三一〇件
(3)家具 一一九件
(4)オートバイ、スクーター 二九件
(5)その他 一七八件

▲あなたの支部（三池労組）について
(1)よくやっている 一、〇二〇名（六一%）
(2)まあやっているが効果は上がらない 二六七名（一六%）
(3)相談すればのってくれる 二三七名（一四%）
(4)活動がにぶい 一二一名（七%）
(5)会社にたのんだ方がよい 三名（二%）

再建団体指定反対・春斗決起集会 二月一四日於市役所前

カンパ・三千万円こす

全国の激励つづく

全国からあたたかいカンパがぞくぞく寄せられているが、現金、物資カンパ、激励オルグもさらにつづいてる。

【カンパ物資】
衣類＝荷車一台分東京渋谷区山手教会より

【カンパ金】
（二月一八日現在）
一、六八九件＝三三、二五八、一二八円也

【来山オルグ】
福炭婦協一八名（二月一八日）

入院者の奥様へ

東京 石塚敦子

入院中のご主人さまをもたれ、正月も返上して日夜看護に心を砕いておられます奥さま方、私はみなさまにお目にかかったことがあるかもしれません。またないかもしれません。どちらにしても、ただいまの私には、みなさまのお顔は思い出せません。私がおん地を訪問いたしましたのは二年前ですので、お名前やお顔が私の記憶から薄れ、心ならずも失礼をしていることが多いと心からお詫びを申しあげます。

去月、病院関係のお世話役にあたられている広瀬さまよりお便りをいただきました。それによりますと、二八〇名の方がいまもって入院療養を続けておられる由、看護者、ご家族のご苦労はさこそとお察し申しあげる次第でございます。

広瀬さまからのご依頼により、一酸化炭素中毒に関する参考事項をすこししらべてみましたが、事故後の急救措置というものが決定的に重要であり、発病後一カ月以上をすぎ、後遺症の段階となったものに対しては、めざましい効果の期待できるものが、残念ながら発見できませんでした。

これは、一つには私の微力にもよるもので、たいへん申しわけなく存じます。

幸いにして一命はとりとめられたものの、重症にて今後長期間、後遺症とたたかわれるご主人さまと労苦をともにされます奥さま方に、私はなにか激励となる言葉をさしあげたくて、こうしてペンをとりました。

一酸化炭素のおそろしい後遺症は、ご存知のように脳軟化症です。人間としていちばん大切な精神のはたらきがこわされて、全快の約束もされずに生きてゆかなければなりません。

世の中には「いっそ死んでしまった方が幸せなのかもしれない」と疑わしくなるような悲惨な生き方もあるものです。私がこんなことを申しますのも、自分自身の境遇がこんな言葉をはかせるのです。

実は私も、一昨年一二月より脳軟化症の老父の看護に明け暮れる運命を背負わされて一年余を経過しました。父のはガス中毒ではなく、脳動脈硬化からきたものですが、文字通り生ける屍、廃人と化して、もはや二度と再び元のすがたに戻る望みはありません。

毎朝毎晩、オムツの世話を欠かすことのできない看護の苦しみは体験のない人には理解できないものです。

毎朝、私はギリギリの時間まで父の世話をし、自分は朝食をとるひまもなく、というより自分が食べることなどすっかり忘れて家をとび出し、走りに走ってやっと遅刻寸前にすべりこみで出勤簿を押します。

そして一日の苦しい勤務を終えると、寒い道を疲れてとぼとぼ歩いて帰ります。入浴が遠のくので、体はあちこちかゆくなっていますが、すこしでも早く帰りたいので、つい一日のばしにのばし、一カ月に一回入浴するのがやっとです。帰宅すれば、父が泣かんばかりに喜んで私の冷たくなった手をとり頬ずりします。帰宅したときの私の両足はむくんで冷たくなっており、座るのに骨がおれるようになっています。

休むひまなく、すぐに食事のしたくにかかります。ときには食事のあとかたづけをする前に、一時間くらい横になってからでないと立ちあがれないほど、ぐったりするときもありあます。手紙を書くのにも、中途で三回もいねむりをしたり、書き終ったとたん、フトンをしくのも忘れて寝こんでしまい、気がつくと午前三時なのであわててフトンを敷くようなこともあります。

父はこの正月で数え年八〇才になりました。世間の人は、こんな高令者はもういつ死んでもよいのだし、なおっても社会復帰ができるわけではなし、手をかけるだけムダだと思っているかもしれません。先の見込みのない人間に対して社会は冷酷です。それだけに私は悲しいのです。社会から見捨られた、なんの価値もなくなった老人でも私にとっては大切な父です。

むかし私は二四才のとき、私の一生涯にただ一度、子どもを生みました。その子は父の顔も知らずに生まれ、育って今は一七才、私は四一才になっていますが、私は戦争の痛手の中で傷つき、さいなまれ、生保患者のみじめさにもおちこんだ時代もありました。

私は腸の潰ようにかかり、毎日八回も出血するような体だった時にも、子どもを育てるために悪戦苦斗しなければなりませんでした。

社会保障がいまよりもずっと不完全だった終戦後、幼児をかかえた女が仂かねばならないということは、たいへんなものでした。けれどもそのたいへんさが、私を強くしてくれたのです。子どもがいなかったら、私は負けて倒れてしまったでしょう。重荷を背負っていたおかげで、私には倒れることが許されなかったために、私は強くならないわけにはゆかなかったのです。

それと同じように、現在の私には父という重荷が背負わされています。私が倒れてしまったら、誰が父の世話をするでしょうか。いまの父は幼児とまったく同じで、私に頼りきっています。私はどんなに勤め先で苦しいこと、いやなこと、くやしいことがあっても、疲れて不きげんになりたくても、父のそばにきたときには、やさしく、あたたかく、あかるい態度で看護をしてやらなければなりません。そのためには、どれほど強くならなければならないか、それは私と同じような苦労を味わっていらっしゃるみなさまだけがわかってくださることとです。

もう一八年前のこと。私は自分のそれまでの人生経験の中から次の言葉を生み出しました。

「人生とは不幸を経験することであり、幸福とは不幸にたえることである」。

そして現在でも、私はこの言葉を真実と思っています。

なにかみなさまのお役にたつことが書けたでしょうか。それともなんの役にもたたないグチをならべただけだったでしょうか?。もしそうだったらお許しください。私には他になにもできなかったのです。

私はさびしくてたまりません。悲しくてたまりません。それでも負けまい、負けまいと努力して一日、一日をすごしています。「生きること」これがたたかいです。それ自体をたたかいとるのです。

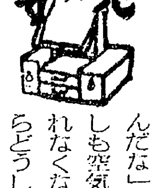
うわべの見た目に、豊かな楽しい生活であったとしても、漫然と漠然とすごす人生なら、それほど貴く価値ある人生とはいえないと思うのです。みなさまには、また私の知らない貴い教訓も生まれてくるでしょう。どうぞそれらを私に教えてください。私が弱りぬいてまいってしまったようなときには、どうぞ見すてないで助けてください。お願いします。

お互いに励ましあいかん難をのりこえていきましょう。それはムダにはならず、いつかまた誰かのために役だつときもあるでしょう。

一九六四年一月二日記

海岸

宮浦支部 森川



潮風吹きつける海辺に立った時なにを思ったのかふと側にそびえ立つがけに根をさらけ出し、いまにも落ちそうな大木に私の眼はそそがれていました。

あの木でさえも自分の生命を守りぬこうとする自然とのたたかいどろは落ち、すこししかついていない土にばくぜんと腰をすえ、いつかはきっと青々とした葉を見せるだろうと、私は一人つぶやいた。

根をさらけ出したその木だけが、どの木よりも立派なように思えた

私はどうしてこんなおかしなことを考えたのだろうかと、あとでおかしかった。私たちと同じだと思ったりもした

また人工島といふのも初めて見ました。その時も「あそこから坑内へ新しい空気を送りこんでやるんだな」。もしも空気が入れなくなったらどうしようどうなるんだろかと、一時の不安もわきました。

凍るような潮風
受けて休みなく
人工島の仂き思ふ度
人の命の尊さを
新ためてかみしむ

被災者の母

いたいけな
愛しき我が子に
ささえられ
たくましく
生きようとする
けなげな
母のすがた。

採石砕機

内職採石所に初めて出勤して

モータの音高く
鋭く荒々しい 大石も
見るまに砕く おそろしさ
わが身ふるえ おびえ立つ
発破の音が こだまする
静かにねむる 山々に

川柳

三川 佐藤トンボ

弔吟

冥福を祈る柩に掌を合せ
読経の中から洩れてくるおえつ
死骸洗う女の顔の無表情
首のない死骸を洗うのが女
死骸覗く女へ柩の中の顔

収容時の模様

血走った眼が病院を駆け巡り
狂気した妻の姿に突き当り
奇蹟とは自分一人が生き残り
掲示板食い入るように名を見つめ
サイレンの音へ恐怖のよみがえり
重患と知らず私服のつきまとい
トラックで運ぶ柩の間に合わず
ガスの中どっこい俺は生きている
雑魚寝する患者を捜す足を踏み
一点を見つめる患者の空虚な眼
ばれるから菰巻きにされたまま昇り
眠るなと嫌というほど叩いた手
一睡もせずに廊下で過した夜
悲惨とは木片胸に突きささり
右往左往逃げたつもりが夢の中
目印しは一本煙突あるところ
人の顔じろじろ見るなとすぐ怒り
牛乳の甘さしみじみ生きかえり
死骸抱く女の姿に眼をそらし

お知らせ

炭鉱俳句集発刊にあたって有志の間でつぎの要項で炭鉱俳句集刊行がもくろまれています。

俳句募集要項

一、炭鉱の生活と風物および周辺山河などを詠んだ俳句で、有季定型を原則とする。（坑内、硬山、炭住、帽灯、立坑、人工島等、直接炭鉱をよんだもの。初詣、七夕祭、花見、運動会、共同風呂、菊作り等の炭鉱での生活をよんだもの。炭鉱地周辺の山河や自然をよんだもの。などあらゆるものを含む）

一、一人三十句以内。原稿用紙二枚使用のこと。略歴として氏名勤務炭鉱、生年月日、出生地、俳歴、現住所などを十行以内に書く。（句集に名簿を附すために）

一、俳句結社、所属の如何を問はない。炭鉱勤務者、炭鉱地帯の俳人を主体とするも、部外者の炭鉱を詠んだ句も含む。

一、物故者、離職者の俳句、有名俳句人の俳句も合せてお知らせ下さい。

一、句稿の締切は四月末日とする

一、句稿送附宛先
福岡県直方市門前町二三〇
野見山 朱鳥

病院にて（上）

一九六三年十一月九日 三川坑大爆発

本所支部労仂部長 広瀬勝鮮

職場巡回から支部事務所に帰ったのが午後二時半頃だった。全電通小倉支部の書記長因幡氏と三池労組一、二〇〇名の指名解雇者だった中山氏が静かな事務所に訪れていた。

組合運動の組織論とその困難性について話している最中、大音響とともに事務所全体がゆれ、窓がガタガタとなった。大牟田では化学工場関係が時折、爆発音を起すので、いつもより大きかったといぶかしくは思ったが、四五〇名の人命を一瞬にして奪った大惨事の音響だとは夢想だにしなかった。

時に一一月九日、午後三時一五分頃。

暫くして、各職場から電話がかかりはじめた。資材分会からは「三川のホッパー附近から黒煙が上っているが、変電所の爆発ではないのか」、本館の事務室からは「港沖竪坑附近に黒煙が見える」とか、夫々の位置から見える黒煙の火元は明確ではないが、相当大きな爆発であるらしいということでは同じ気持であることが口調から察しられた。

保安部の係員に電話すると「三川坑外の配電所附近の爆発らしいが、確認されていない」ということだった。配電所の爆発だとすると坑内に通ずる一切の電気は切断されるではないか、通気がきかなくなればガス発生を誘発する危険性がある。揚水ポンプに支障をきたし、坑内出水の危険性はどうなるか、いろいろな不安がつぎからつぎへと錯綜する。

四時すぎ、本部から三川坑への緊急招集がかかった。約一ケ月前の一〇月一八日に、一度に四山坑で三名の殉職者をだし、既に就労後四八名にたっした人命軽視の会社の仕打に憤りを覚えながら、犠牲者のいないことを念じながら、バイクを走らせた。

諏訪橋を渡ったとたん、けねんしていたことが、事実であることを知った。道路上には硝子の破片が散乱し、左側店の硝子戸は骨枠だけが残っている。吹きとばされた看板、ぶらりと屋根から垂れ下っている看板、はりがねも曲りくねって、窓枠にまつわりついている。道路上には多くの人々が、三川坑棚内を指さしながら声高に話している。

爆発がいかに大きかったかを物語っている。

坑口から三〇〇米の所まで、坑木や鉄柱が飛び散り、屋根瓦を破損した個所が、数えきれない程であったことが後日判明した。

会社側はこれら民家の復旧作業に直ちに着手したが、隣組の世話人になにがしかの金を渡し、被害の甚大さに口をふさぐ工作をしたことが一隣組の世話人の話から伝へられた。

三川支部、三川坑正門の前には急をきき、数多くの組合員、家族の人々がつめかけている。不安げなその表情には、安否をきづかう肉親の痛ましさがある。どの程度の災害かを早く知りたいと組合員に聞いてみたが事情はつかめない。執行委員も災害現場へ行ったのだろう一人も見当らない。ただ事故は坑外の爆発だけにとどまらないことが、全体の異常な空気から察知できた。

間もなく、炭じん爆発であることがはっきりした。入坑者は常一番と一番方の残業している者、それに二番方で入坑し、作業に着手したばかりの時間であることが判明した。惨事は坑内の膨大な範囲にわたり、犠牲者の数も想像のつかないほどのものであることがはっきりしてきた。

はこびこまれた負傷者の処置（十一月九日深夜）

爆風は坑口正面の第一原動機室の内部をからになるほど吹きとばし坑内の電気、排水ポンプ、通気用の扇風機などを全滅させ、すぐそばの人車々庫のスレートを粉々に吹きとばし、鉄骨をへしまげていた。

各支部の労仂部長は、入坑する準備を終った。夜気が冷えびえとする。夜空には星がきれいにまたたいていた。下界のこの大惨事をどのようにみつめたことだろう。

薄暗くなった五時半頃、坑口附近から「上ったぞ」という声が聞えてきた。一瞬、熱いものが身体をはしる。「よかった」「皆無事でいてくれ」と祈る。

間もなく遺体なのか負傷者なのか判別するいとまもなく、救急車消防車が次からつぎへと昇坑者を病院へ搬送する。

家族、組合員の往来がこのときからひときはげしくなった。

宮川組合長は会社の災害対策本部と三池労組の控室をせわしくいったり来たりしている。赤腕章の各執行委員は四山坑や宮浦坑に逃避し昇坑し始めた組合員の世話や坑内の実態調査をするために、あるいは遺家族、被災者家族の対策に、または地域連絡に統制と規律をもって、それぞれ分担され行動を開始した。

七時頃、宮川組合長から「広瀬さんは病院対策のため、すぐ行ってくれ、一切の責任は任せるから……」

入坑する準備をしていたため、坑内着に地下足袋、キャップランプという姿のまま、ちょうど昇坑した負傷者を搬送する救急車に飛びのり、天領病院に向った。

車内の負傷者は三池労組員だった。車の振動はひどい。苦しげにうめき声を立てる負傷者に、つきそった同僚が「しっかりしろ」「頑張れ」と励ましの声をかけている。「死んではならない」、災害が未曽有の大惨事になりつつあるという実情がわかるにつれ、やるせない、はげしい、憤りが腹の底からこみ上げてくる。

「頑張れ」「もうすぐだぞ」と必死に苦痛とたたかっている負傷者に声をかける。

天領病院外科手術室前に止った車から直ちに手術室にかつぎこむ。

肉親の安否をきづかって、手術室の入口、廊下、駐車場には二百名近くの人たちが落ち着かぬ面持でたっている。車が負傷者を運んでくるたびごとに、真剣な、そして不安げな眼をなげかける。父では、息子ではなかろうかと看護人にかつがれて行く負傷者の顔をのぞきこむようにして人の波が動いていく。夫ではなかった、息子ではなかったと知ったとき、再び不安な暗い顔は駐車場の方に向けられる。

手当所では、静かに眠ったように注射をうける者、ただちに酸素ビンが持ちこまれ酸素吸入が始められるもの、リンゲル、輸血を必要とする者、医師の指示する声と患者の苦悶の声が錯綜する。爆風が吹きつけた黒い顔、眼はそのために開かないのか、つぶったままの多くの負傷者。

やっと肉親を探しあて、無意識のまま、苦しげに身をもがく夫の身体を、しっかりとだきかかえ、「父ちゃん」と一声、あとはベットに身をくずす妻の姿、生きていてよかったという安ど感に涙はとめどもなく流れる。

負傷者は息つくひまもなく、次からつぎへと運びこまれてくる。九日の夕刻から十日の昼近くまで三百数十名の負傷者に、手当所は全く大混乱という以外に表現の言葉を知らない。

白衣に、血と炭じんの黒いしみをつけた看護婦さんたちも、全く無我無中であった。一分でも早く処置をし、苦しみから解放させようとするけん命の活動は、美しく頭の下る思いであった。交代もなく、一睡もせず、解放されたとき看護婦さんたちは死んだようにねむりこけていた。

一方遺体処置場は悲嘆と焦そうのるつぼであった。

揚水管の破裂のため、一三度の傾斜を、坑底をえぐりながら流れこんだドロのために遺体は全身蓮池の泥をぬりつけたようになり、見分けがつかなかった。

この泥まみれになった遺体が担架にのせられ、廊下を走ってくる。駐車場から遺体処理室までの廊下や控室には百数十人の家族がつめかけていた。その人波が、遺体が運ばれる度に、どっと押し寄せてくる。「まって下さい！処置をしてからお名前を知らせますから！」と制止する三池労組の執行委員の声もとどかない。なんという悲惨なことだ。せめて生きていてくれと願ったのもむなしく、死に目にも会えず、無惨な姿となる現実の冷酷さ！誰の責任だ！一体どうしてくれるのだ！（つづく）

九条改悪を明文化

改憲派だけの憲法調査会の論議 （時評）

三十二年いらい八年間、日本国憲法を〝調査〟してきた内閣の憲法調査会（会長・高柳賢三氏）は二月六日の起草委員会で最終報告書の核心で第四編の（前文）（天皇）（戦争放棄）の部分の原案を審議し、大筋を了承した。発表された内容は①前文は表現・内容ともふさわしくなく改正を必要とする②天皇制についてはほぼ現行憲法を支持する③第九条（戦争放棄）に関しては自衛隊は違憲ではないが現行憲法では解釈上疑義を生ずるから改正を必要とする、という意見が多数であったことが明らかにされている。調査会は昨年中に第一編（調査会の成立と構成）第二編（調査会の組織）第三編（調査会の調査審議の経過）を完成したが、今後毎週起草委を開いて第四編、第五編の仕上げにかかり六月ごろには最終報告書が国会・内閣へ提出される運びになっている。

新聞をうかつに読むと、調査会の審議は日本のすべての憲法論議を網らして「憲法改正、是か非か」が討議しているかにみえるが、実はそうではない。調査会の設立趣旨そのものが憲法改正の具体的提案勧告を行なうことだった。調査委員会の多数も自民党の国会議員、改憲派の学者で占められているのだから改憲論が大勢を占めるのも当然のことだ。また「高柳意見書」に代表される少数意見が、民主勢力の〝護憲〟の立場で憲法改正反対を主張しているかにみえるが、高柳会長自身も「第九条（戦争放棄）はただちに実現しえない理想をかかげた政治宣言と解釈すべきであり、その解釈のもとでは自衛軍の保持も可能である」と述べているとおり、現行憲法でも再軍備には影響ないのだから、いま国民を刺激してまで改正する必要はない、ということだ。

池田首相はさきの施政方針演説で「この機会に国民の憲法に対する理解が深まることを期待し、世論の動向を尊重して慎重に対処したい」と述べているが過日開催された自民党の大会で採択された今年度の運動方針は憲法改正を強く指向している。

現憲法のもとで強行されている再軍備復活や国民の諸権利の骨抜きの反動諸政策こそ注視すべきであり、それに対決する具体的なたたかいがいま必要なのである。【KNA】

平和と軍縮のための日本大会開く

「新組織をつくることに反対」と岩井事務局長が挨拶

転期にたつ平和運動の新路線として内外の注視をあつめていた〝憲法擁護、核武装阻止、平和と軍縮のための日本大会〟は一月三十日午後一時半から文京公会堂で、沖縄を含む全国各地の労仂者、農民、中小企業者、さらに学識経験者、婦人、青年学生の諸団体の代表二千六百三十三名の参加のもとに盛大にひらかれた。

総会は大会事務局長伊藤茂（社会党）氏の司会で、大会役員に成田知己（社会党）、岩井章（総評）氏らを含む十名の議長団を選出したのち、運営委員長に安恒良一（総評）、起草委員長に西風勲（社会党）、高橋鉄志（総評）の両氏と起草委員をえらんですすめられた。

まず、安恒運営委員長が主催者としての挨拶と経過報告を行ったあと、伊藤事務局長からソ連平和委、朝鮮平和委、ユーゴ平和委、ハンガリー平和委、チエコ平和委、ポーランド平和委ブルガリヤ平和委など外国からのメッセージ及び広島市長、石川達三、都留重人、大島渚氏など百余氏の文化人学者個人と国内百余団体からの祝電が披露された。

続いて各界を代表して社会党成田書記長、総評岩井事務局長被団協竹内代表、広島原水協伊藤事務局長、藤本早大教授（科学者）、中村法大教授（憲法学者）、久布白婦矯会長 詩人江間章子さん、西浦社青同委員長から平和運動に対する決意が表明された。この中でとくに総評の岩井事務局長は「原水協は国民的立場からみれば事実上破産状態となっている。しかし、われわれがこれに対抗する組織をつくることには反対である。われわれは分裂を固定化させてはならない。」と強調して注目をあびた。

大会はこのあと、社会党国民運動委員長井岡大治氏が、(1)平和をめぐる世界の情勢、(2)アジアと日本の戦争政策、(3)平和のための行動課題、(4)われわれの行動計画、からなる基調報告を行い、午後四時十分、第一日目を終了した。

第二日（三十一日）は、この基調報告を中心に教育会館、国労会館、全電通会館など六つの会場で分散会を開いたあと、午後六時から日比谷野外音楽堂で閉会総会を開き、別項のアピールを発表して散会した。予定されたデモは雨天のため中止された。

【アピール】日本国憲法はいま制定後最大の危機に直面しています。憲法改悪は、国民の生活と権利に重大な圧迫を加えるばかりか、歴史の流れに逆行するものです。これには「憲法擁護国民連合」の組織を日本中の町に村に、職場につないでたたかいます。また日韓会談、原子力潜水艦寄港F一〇五D水爆戦斗機などによる軍事基地の強化に反対しこれを阻止するためには献身的な任務を果す決意です。また昭和四十五年を期限とする安保条約の廃棄と日本の中立をめざし、国民的な戦線を統一し発展させるなかで沖縄の祖国復帰、日中国交回復をはかり、混迷を続ける原水爆禁止運動に対しては、「いかなる国の原水爆にも反対する立場」で「その全面的廃止」をめざすたたかいをすすめ、この運動に責任と誠意をもつ地位を占めたいとおもいます。平和運動が特定の政党に私物化されないよう、また特定国の利己的な利益に従属することのないよう努力することを誓います。